

Miku la Chic

ラ・プリマベェラ

Op.9

'La Damoiselle Éluë, Poème Lyrique' L.62

作曲 クロード・ドビュッシー

Claude Debussy 1862-1918 1887 年頃

— 創作日本語歌詞による —

2022 年4月16日 β1版

〈八重^{やえ}柵^{たなぐも}雲押し分け、春の息吹、大地へ臨む〉

〈立春^{しゅんくし}の祝詞、到来の御告げ〉

天と地にあまねく 息吹を
霞を哀れぶ 風、風、風 吹き渡れ

〈春眠の目覚め〉

小鳥も楽しげに 懐かしき声 野辺山を超え
そうよ今ひらく これがプリマベール
夢の絵本が 飛び出す

〈雨水、草木の芽が出る〉

一つ二つ、ほら ほころぶ^{つぼみ}蕾^{ことほ}が<今>を寿ぐ
しとしと雨 濡れて行こう

〈啓蟄、虫が地上に出で鳥が姿を現わす〉

あの雲雀^{ひばり}一^{しき}頻り飛んで
なんていじらしい努力 みんなが^{ほほえ}微笑む

〈春分=彼岸、理想の境地をさとする分節点〉

一つじゃないでしょ 夢の<カタチ>

〈清明、万物清く陽気となる〉

Hallo! みんなに力あげるよ
ほら 寂しさ さよなら
廻れ廻れ廻れ プリマム・モビレ
雲が晴れる!

〈穀雨、百穀を潤す〉

思い切りメロディ ^{うた}謳おう!

〈春の閉場詞〉

あさき夢みし、かな

◎制作ノート

ローマ賞をとったドビュッシーがイタリア留学先のメディチ荘から脱走するようにパリに戻ってからアカデミーへ提出した最後の楽曲である『選ばれた乙女』は、イギリスのラファエル前派の画家詩人ロッセッティの抒情詩「祝福せられたる乙女」に靈感を得て書かれたものとされる。ドビュッシーの初期作品は、作曲家としての地位を確立した後期の作品群にくらべて日本で採り上げられることも少なく、いままで眼中にない作品群だったが、小松耕輔の『楽聖ドビュッシー』の校訂版にある次の言葉がどうしてもひっかかって、音源を探して聴きはじめたという経緯がある。

「……尤も、アカデミーが先にこの作曲家を批判した所の、表現および形式に於ける^{もつと}朦朧性^{もろろうせい}に対する組織的傾向は、未だその中に感ぜられはするが……。然しここでは、彼の諸傾向とこれらの表現は、より控え目に現れているのみならず、主題の性質およびその漫然たる性格のために、正当化されているようにさえ見える」(同書 44 頁)

このようにも歯切れが悪い表現が腑に落ちない。何を言いたいのだろうか。この曲にはオーケストラ版とピアノ伴奏版があるが、前者はなるほどぼっと聴いてぱっとわかるような構成ではない(朦朧性)。一方でピアノ伴奏版は引き絞られてやや立体的に見えるものの、後期作品とくらべると執筆すべきものが無いという当時の楽壇の忖度か、に近いように読めた。

この曲が分かり難い(漫然たる性格)のは、主役である乙女のソプラノが全体のほぼ半分(β 1 版で7分程)たたないと登場しない点や、場面の動きがコーラス&レチタティーボ&ソプラノという3声部によって紡がれている複雑性にあると思う。コーラスは、演劇でいうト書きのような情景や動作の説明などを歌い、レチタティーボは浄瑠璃の黒子かトーキーの弁

士のような存在としてソプラノの感情に肉付けするという役回りだが、いずれも女声だし、歌詞の内容を労せずとも追えようはずもない日本人にとっては、混濁して3つに分けた効果の有り難みがおそらくほとんど汲み取れない、という図式になっているのではないか。ということで、歌詞の声を1つに切りつめ、日本語の歌詞を当ててみようと考えたわけである。

とはいうものの、原作の詩の内容を知ってから聴き直してみても、なにかチグハグ感がある。だが、歌詞の内容を一旦忘れて何度も繰り返して通して聴いていたある日、ふと『プリマベラ』という音列が浮んできた。イタリア語で春を意味する同名のテンペラ画は、ボッティチェリの『ビーナスの誕生』と並んでウフィッツィ美術館の至宝。目の前で見ると教科書などで見るのとは違って巨大で、隅々まで迫力が及んでいる。ヴィーナスの上にキュービッドが描かれ、春という自然現象を寓意的な手法で表現したこの作品の説得力はストレートで力強く、だれしもが心を奪われるに違いない。ドリュッシーが春をテーマにした作品にはほかにも数曲あるが、ローマ留学直後であることから、実はイタリア国内のどこかでこの絵画を見たドリュッシーが春という構想で作曲を始めたものの、逃げた都合上それを悟られないように隠蔽した「春」の曲だった、という、ほとんど何の根拠もない「架空のシナリオ」に基づいて日本語歌詞を捏造することにした。ダヴィンチやミケランジェロ等の作品をX線撮影したら、キャンバスや板の下に別の古い絵が浮かび上がったといった発見がままあるが、その音楽バージョンという趣向である。

とはいえ、メロディに最初に下りてきたこの単語もはたして日の目を見ずにボツになってしまうのではないかと、思うほどたいへんな難産だった。感情や場面に脈絡のある動きがあれば、歌詞にも動きを付けていけるが、春そのものだけの静止画に20分とかもある曲のメロディに合わせて「間を持たせる」歌詞がどうにもつながらない。半月くらい頑張っていよいよ

断念しようと思っていたが、たまたま手に取った古今和歌集の仮名序を読んでいる、日本の四季の移り変わりを昔の人はどうやって辿っていったのか考えを廻らしていたときに出てきたキーワードが「二十四節気」である。

静止画の連続という構造は『展覧会の絵』とほぼ同じで、ばらばらの組曲をプロムナードで巧みに繋ぐというこの曲に退屈感はほとんどない。似たような構造の作品としては「東海道五十三次」の一連の版画とか、ジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』などにもあるが、前者は出発とゴールが整備された街道という前提、後者は世界旅行の交通手段と文化の多様性に加えて最後に科学的なオチをもってくるという一捻りがあることでマンネリ化せず動きが失われぬ、というところがミソである。ということで展覧会の絵の一点一点にあたる部分を、二十四節気の「春」フェーズにあたる立春、雨水、啓蛰、春分、清明、穀雨のキーワードに順番に当てていけば時間の動きが出るのでは、ということでやっと道が開けた。

日本語の創作歌詞を通して読んで頂くと、有声の言葉だけだとストーリー性はほとんど感じられないのではないかと想像する。しかしながら、メロディが醸し出す情感と「切り取られた歌詞のビジョン」はまあまあ連絡しているのではないかと思いつつも、やはりまだまだ突飛なので、ト書きではないけれども、歌詞にはしないストーリー展開を補填すればどうか、ということ考えたときに浮んできたのはストラビンスキーの『春の祭典』である(1913年パリ初演)。というわけで説明書きを付けた。この設定で、冒頭から主役登場までの退屈な7分間にも、ダイナミックな動きのイメージが湧いて楽しめるのではないかと思う。

創作歌詞のなかでコメントすべきポイントが何点かある。まず「今ひらくこれがプリマベラ 夢の絵本が飛び出す」は倒置かつ伏線で、プリマベラ=春=絵本という比喩をもとにして、「飛び出す絵本をひらくように、冬

に見た夢だった春が現実となって飛び出てくる」のオキシモロンなニュアンス。「Hallo」は、現在軽い挨拶として普及している英語「Hello」の元になった1865年初出とかいうフランス語。当初は歓喜の声だったとかで、おそらく「やった」とか「わーい」だろう。「プリマム・モビレ」とはラテン語のPrimum-mobile（原動力）で、トレミー天文学の宇宙モデルにおいて空の上の果てに見えない殻があり、それが回ること宇宙の星をはじめとする万物が動くという解釈を指す。最後に「夢の飛び出す絵本」という絵空事がサビで「音に出すメロディ」に惚って鳴り響いたのを喜ぶ、というオチ。原作結尾の「乙女が悲しくて涙する」は、目出たく、春との別れの清々しい涙になった。

初出：令和四年四月十六日